

大学生の意欲低下に関する研究 — スチューデント・アパシー傾向との関連から —

原 田 克 己

問題と目的

留年する大学生が増えるとともに、大学生が無気力化してきていると指摘され始めてから久しい。学業に対してのみ選択的に意欲を失うという特徴的な無気力状態について、Walters, P. A. Jr. (1961) がスチューデント・アパシー（以下アパシー）の概念を提出して以来、日本において、このような意欲の低下を示す学生についての事例研究報告が数多くなされている。しかしこの特徴的な意欲の低下について、より軽度な一般大学生を対象として実証的に検討したものは少ない。また、実証的な研究を行ったものについても、人格障害圏にあると思われるアパシーと、一般の大学生に見られるアパシー傾向とも言えるような状態とを明確に区別していなかったり、アパシーに見られる心理的、行動的特徴に関連づけている要因が不十分であったりと、問題がある。

そこで本研究ではこれらの問題をふまえて、この特徴的な意欲の低下を示す学生の心理状態に着目し、一般大学生の中にアパシーに見られる心性がどのように存在するのか、また、意欲の低下を示す領域によってこの特徴的な心性の関わり方が異なるのかを把握することを目的とする。本研究におけるアパシーに見られる心性とは、アパシーを呈する学生に特徴的に見られる心理状態と性格のことである。本研究ではこれらの要因と意欲の低下との関係を検討することとする。また、意欲の低下が必ずしもこの特徴的な心性と関わりをもつとは限らない。大学での意欲は、大学への期待やそれに対する満足程度によって左右されると思われる。そこで、大学進学動機、進学大学選択理由、大学に対する満足度もまた、意欲の程度に関係する要因として取り上げることとする。そして、大学での意欲の低下を示す領域ごとに、これらの要因がどのように影響しあっているのかを検討する。

さらに、アパシーについては事例研究の中で、男性に多く見られると指摘されてきている。そのため、一般大学生にも同様の傾向が見られるのかどうかも検討する。また、アパシーの心理力動の根底には父性拒否があるとされているが、一方では、日本においては母親との関係の重要性も指摘されている。つまり、アパシーの発症、程度には親との関係が大きく影響するということであり、本研究では父親母親に対する認知、評価を尋ね、それと

アパシー心理との関係を見ることで、この点を検討することとする。

方法

調査時期・調査対象：1996年11月上旬。国立N大学1年生407名（男285名、女122名）。

調査手続き：質問紙。授業時間の一部を用い回答。所要時間はおおむね20分。

質問紙の構成：①大学進学動機尺度、②進学大学選択理由尺度、③アパシー心理尺度、④アパシー性格尺度、⑤意欲低下領域尺度、⑥父母認知尺度から構成。尺度は⑥が5件法「全く違う」から「まさにその通りである」で、それ以外は4件法「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」。

結果と考察

まず、尺度について、大学進学動機から「専門性獲得機能考慮」「教養獲得機能考慮」「状況的・付加的側面考慮」、進学大学選択理由尺度から「自己希望考慮」、アパシー性格尺度から「評価への過敏さ」「強迫性」「対人関係の取り難さ」、意欲低下尺度から「授業意欲低下」「学業意欲低下」「大学生生活意欲低下」、父母認知尺度から「有能性」「支配性」の各下位尺度を、因子分析により構成した。

アパシー心理の程度について性別と学部（文系・理系）の二要因分散分析を実施したところ、性別と学部それぞれの主効果が見られた。つまり、女子学生に比べて男子学生の方が、文系学生に比べて理系の学生の方がよりアパシー心理の程度が高いという結果であった。性差については人格障害圏のアパシーに見られる傾向と同様の傾向であり、一般大学生においても男性の方がアパシー心理を感じやすいということが明らかとなった。またアパシー心理の程度によって父母に対する認知が異なるかどうか、父母それぞれの認知について、性別とアパシー心理の程度（高・低）の二要因の分散分析を実施したところ、母親に対する有能性の認知についてのみ、アパシー心理の主効果が見られた。つまりアパシー心理の程度が低い者の方が、より母親を有能であると認知しているということであった。さらにそのような父母をどの程度評

働しているかについても、同様の二要因分散分析を実施したところ、母親に対する評価に交互作用が見られ、女子学生はアパシー心理が高くなると母親に対する評価がネガティブなものになるということが明らかとなった。従来アパシーを考える際には父親との関係が重要視されているが、これらの結果は母親との関係が重要であるということを示唆しており、アパシー心理について考えるとき母親の影響は無視できないことを意味していると思われる。

次に授業、学業、大学生活それぞれの場面における意欲の程度について、性別と学部（文系・理系）によって差が見られるかどうか、二要因分散分析を実施したところ、授業に対する意欲について性別の主効果が見られ、大学生活に対する意欲について学部的主効果が見られた。つまり、授業に対する意欲は男性の方が低く、大学生活に対する意欲は理系学生の方が低いという結果であった。これはアパシー心理と同様の結果であり、このことから、意欲低下の行動面、心理面どちらについても、男子学生、理系学生の方がよりアパシー的であるということが明らかとなった。意欲の低下を示す学生のケアに当たるとき、男子学生、理系学生についてはアパシーについての理解が必要であると言えるであろう。

次に、授業、学業、大学生活に対する意欲の程度にどのような要因が影響を与えているのか、これら3領域のそれぞれを目的変数に取り、父母の支配性・有能性を外生変数にして、大学進学動機の側面「専門性獲得機能考慮」「教養獲得機能考慮」「状況的・付加的側面考慮」、そして「自己希望考慮」「大学に対する満足度」「アパシー心理」、アパシー性格の「評価への過敏さ」「強迫性」「対人関係の取り難さ」を内生変数に取り、男女個別にパス解析を行った。その結果、アパシー心理の増加、および授業、学業に対する意欲の低下への影響過程において、男子学生と女子学生の間で大きく異なる結果となり、一般大学生のアパシー心理の増加、意欲の低下につながるメカニズムに性差があることが示唆された。また学業に対する意欲の低下にはアパシー心理は関与しておらず、意欲の低下が見られるからといって必ずしもアパシー的な要素が伴っているわけではないことが明らかとなった。

さらに、大学生活に対する意欲の低下については、男女で似た影響過程が見られ、またアパシー性格のすべてが直接的に影響を及ぼしており、授業や学業に対して意欲を失うのとは質的に異なった問題があることが示唆された。下山（1995a）は大学生活に対して意欲の低下を示す場合には発達的問題を予測させ、深刻な事態であると指摘している。今回の結果はこの指摘を支持するものと言えるであろう。また、女子学生においては多くの要因で母親の性格が影響を与えており、女子学生の大学での適応を考える際には母親の影響は無視できないということが示唆された。男女それぞれが異なった影響過程を示していることから、大学生が大学で不適応を示した場合には、男女それぞれに異なった臨床的処遇を考える必要があると言える。さらに、今回の分析ではアパシー性格として取り上げた強迫性が意欲の低下を抑制する方向で機能していた。従来の指摘ではアパシーを呈する学生は完全癖であり、強迫性格の持ち主であるとされている。この矛盾の原因は、今回の調査対象が一般大学生であることが考えられる。人格障害圏のアパシーに伴う意欲の低下と一般大学生の示す意欲の低下との間で強迫性は異なった振る舞いをすると考えられる。しかし、一般大学生において意欲の低下を抑制する方向に強迫性が関与しているということは、積極的に勉強をしている学生の中には、強迫的に勉強に従事せざるを得ないという側面があることが考えらる。したがって、一見適応的である学生も、非常に不安定な状態にある可能性があることが予想される。

今回、一般大学生の示す意欲の低下は様々な要因が関与しており、意欲の低下を示す領域によって、異なった要因が関与していることが明らかとなった。また意欲の低下を示す領域によっては、より深刻な事態であることが示唆された。意欲の低下について何らかの処遇を行うとき、意欲の低下が見られる領域によって、また男子学生であるか女子学生であるかによって、異なった処遇を考える必要があると言える。今後、意欲の低下につながる要因をさらに検討し、より詳細な分析を行う必要があると言えるであろう。